

窯業地・瀬戸の伝統性とその評価

―民芸運動の「産地語り」と瀬戸本業窯についての覚書―

濱田琢司

はじめに

愛知県の窯業地である瀬戸は、いわゆる「六古窯」の一つとして知られているように、日本において最も長い歴史を持つとされる産地の一つである。陶祖と伝承される加藤四郎左衛門景正（藤四郎）が登場し、現在にも残る古作が焼かれるのは、鎌倉から室町時代にかけてのこと。そうした歴史を有するために、単体の作品としては、古くより茶人たちに重用されるものもあった。近代期の茶人の一人である高橋義雄（箒庵）が、大正期に他の数寄者や名家のもとにあつた茶器を総覧しようと茶人と茶碗の「名物」を集めた、『大正名器鑑』（全九編）にも、「古瀬戸」「春慶」

など多くの瀬戸産の作品が収録されていることから、もうした評価の高さを知ることができる¹。そのなかで、例えば、「大名物」の「古瀬戸肩衝茶入 銘 横田」は、東山御物に含まれていたものであるというので、足利義政の宝物であつたということになる。それが、信長、秀吉、家康と渡つて、尾張徳川家に受け継がれ、現在では、徳川美術館の所蔵となつている。ちなみに、「名物」とは、茶器のグレードを示すものの一つで、「名物」「中興名物」「大名物」などの区分けがある。その区分けの来歴は必ずしも単線的なものではないが、その確立に大きな役割を担つたのは、江戸後期の大名茶人である松平不昧の『古今名物類聚』（一七八九）であるという²。これによつて、江戸期前半に活躍した茶人の小堀遠州が選り取つたものを「中興

名物」と、それ以前より「名物」とされていたものを「大名物」とすることが定着していった。すなわち、「大名物」とは、日本の茶器のなかでは最古の部類に入るものとなるわけである。そして、例えば、茶入に限ってみると、その大半は、大陸からの伝来品である「唐物」であり、「和物」でここに名を連ねるのは、一部の「古瀬戸」のみである³。

このようにその「古さ」が、評価のポイントの一つともなる瀬戸であるが、一方で、産地としての伝統性が評されることはそれほど多くなかったようにみえる。もともと、それは、おそらく瀬戸に限ったことではない。近代以降の日本の工芸とその生産についての評価としては、第一に逸品としてのモノの評価があり、その場合には、産地の生産形態などについては、あまり注意が払われることはない。例えば、陶磁器の「鑑賞」について分析的な視点を導入し、「鑑賞陶器」という新たな概念を提示した奥田誠一も、陶器を鑑賞する大前提として「真偽を鑑別する事」をあげているように、ここで基本となっているのは、一個のモノとしての工芸品（陶器）であり、産地は、そのモノを生み出

した場として説明的に扱われるに過ぎない⁴。すなわち、瀬戸の場合も、評価される「古さ」とは、産地の（伝統を有するという意味での）古さであるよりも、例えば、「古瀬戸」という一個のモノのもつ古さなのである。

他方、産地それ自体は、どのように論じられるのだろうか。近代以降においてそれは、多くの場合、産業地としての評価という形で語られてきた。すなわち、生産の状況、規模、流通などといった経済的な側面についての評価・記述としてである。後述もするように、「古窯」でありつても近代窯業の先端でもあり続けた瀬戸についても、産業生產品としての瀬戸焼をつくる産業地としての記述が基本となっている。

しかし、産地の語りというものを考えたとき、もう一つのベクトルを持ったものも存在する。それが、産地の伝統性を積極的に評価するタイプの語りである。それは、古くからの逸品もたず、同時に、機械産業化にも遅れた「後進」の産地に対して、その後進性を「伝統」として積極的に読み替えて、評価しようとするものである。こうしたタイプの産地評価として代表的なものは、筆者もかつて、美

術系の語りおよび産業系の語りに対する「対抗的言説」として論じた。民芸運動によるものである。民芸運動とは、大正時代の最末期に、思想家の柳宗悦らを中心としてスタートした工芸をめぐる文化運動である。これは、上述のような「逸品語り」ではない形で、産地の歴史性・伝統性を評価するものとしては、おそらくは最初の、そして最も大きな影響をもたらしたイデオログであった。

民芸運動による評価は、いくつかの産地においては、きわめて大きな意味をもった。例えば、運動の主導者であった柳による、以下のような言葉からも、その理由の一端を識ることができるだろう。

大体日本の工芸、風俗、生活、信仰等でよく伝統が残っているのは北の国々、青森、岩手、秋田、山形等であるが、かかる北端と南端の琉球とに、純日本が一番よく残存していることは特に注意されていいことだろうであらう。

或見方からすれば、それだけ文化が遅れているともとられるが、併しそれだけ今でも純日本的なものを保

つ力を持っているとも云える。特に工芸の領域では、「新しさ」は改悪を意味する場合が多いのであって、かかる変化は必ずしも進歩を意味しない。否、今の工芸は色々の点で退歩して了ったところが多い。

これは、沖縄について書かれた文章であるが、他の地域・産地も含めて、およその論調は変わらない。すなわち、近代的な発展という視点にたつたときに、「遅れている」ところほど良いものをのこし、対して、「新しさ」は改悪を「さえ意味するのだという。このような形で産地を捉えようとする民芸運動の語りは、すなわち、「遅れている」とされる産地にとって、その「遅れ」を、そのまま積極的に読み替え可能な魔法的言説ともなったのである。それは、柳の引用中にもあるように、東北や沖縄など、日本の「周辺」地域の一部にとって、その地域の文化や工芸も含めた生産物の価値を転換させるインパクトを持ったものでもあり、またこのことは同時に、民芸運動という文化運動自体の独自性ともなっていた。

では、民芸運動による言説や働きかけは、非後進地にお

いては、どのように作用したのだろうか。本論では、瀬戸という古くからの陶磁器業の中心地を扱いながら、とくに、民芸運動が進展する昭和前期の記述に注目しつつ、このことについて考えてみたい。また、瀬戸という地を対象とした「産地語り」とその伝統性の評価を、ここに絡めながら検討してみたい。

第一章 瀬戸の「産地語り」と瀬戸本業

瀬戸焼の産地である瀬戸市は、愛知県の中北部に位置する。この地は、冒頭にも記したように古い歴史を持つ窯業地であるとともに、県境を挟んで岐阜県側には、多治見、土岐、瑞浪へと、窯業地が連なっており、近代以降、日本の窯業生産において非常に大きな役割を担った地域である。そうした産地であるが故に、経済史、産業史、経済地理学などの分野において、瀬戸を含む、この地域の窯業に関する研究には厚い蓄積がある。ここで、それらについて吟味する十分な準備はないが、本稿において検討するような、その伝統性の評価について、とくに民芸運動との関わ

りから扱うようなものは、管見の限り、ないように思う。もちろん、瀬戸という産地全体について、時間的にも幅をとってみていけば、様々な論考があるが、瀬戸焼全体における表象にかかる問題については今後の課題としつつ、ここでは、その対象を限定しつつ、検討したい。

ひとまず、産地としての瀬戸が、概略としてどのように語られるのかを確認してみよう。陶磁研究家の小野賢一郎が編集の中心を務め、一九三五（昭和一〇）年に全六巻で刊行された『陶器大辞典』の「瀬戸」の項の冒頭には、次のように記されている。

尾張瀬戸は本邦中で最旧・最大の陶業地にして、その継続期間が最も長く、随って遠近各地の分業も亦多く、且つ間接に技術を伝播した方面の広さに於ても、等しく無比の勢力を示すものである。稍これと匹敵すべき場所は、独り肥前の唐津及び有田地方を推すべきも、尚ほ歴史・技術・及び産業上の諸点に於て、後者は到底前者に比肩しがたい所がある。⁷

瀬戸は、すくなくとも昭和初期には、日本における「最良・最大の陶業地」であり、「歴史・技術・及び産業上の諸点に於て」、国内のもう一つの陶磁器業の集積地であった肥前・有田地方であっても、瀬戸には「比肩しがたい」のだとされる。このような形で、瀬戸は、その歴史や規模の面から、日本を代表する産地としての評価がなされる。現在において、その生産は低下の傾向にあるが、一般的な評価としては、大きくは変化していないのではないかと思われる。

この瀬戸について、民芸運動の周辺における評価をみると、例えば、運動同人の河井寛次郎と柳とのやりとりとして、次のようなものが残っている。

柳：河井は、君は日本のものじゃ何が今まで一番心惹かれてた。

河井：そうだね、やっぱり、南から言えば 苗代川のもの、それから龍門司のものね。それから大分県の日田の小鹿田焼。

〔中略〕

それからずっとこっちへ来て、山陽道で堀越の窯のもの、それから丹波のもの。それからずっとこっちへ来て、ちよつと信楽、瀬戸はもうものが悪くなつてね。ずっと跳んで益子へ跳ぶね。それから益子へ跳んで、益子から次にはやっぱり会津の粗物だね。

これは、一九五三（昭和二八）年、運動同人の一人で、イギリス人陶芸家のバーナード・リーチの来日に合わせ、ともに運を最初期から牽引してきた柳、河井、そして同じく陶芸家の濱田庄司の4人で、焼物をテーマとして行われた座談会におけるものである。柳に、日本の焼物として心惹かれるものは何か、と問われた河井がそれに答えている。ここで、河井は、瀬戸について「もうものが悪くなって」と発言している。この点は、「はじめに」において示した柳の引用文中の「新しさ」は改悪」という点と関わっているのだろう。陶業の先進地としての瀬戸の「現在」について、民芸運動は必ずしも良い評価をしてこなかったのである。

その一方、産地としての瀬戸の伝統性を考える時、近年

の瀬戸の「産地語り」としてほぼ必ず言及されるのが、「瀬戸本業」という言葉である。瀬戸には、陶祖としての加藤四郎左衛門景正の他に、磁器生産を始めるきっかけをつくったとして「磁祖」と呼ばれる加藤民吉がいる。民吉は、長崎の波佐見において磁器生産を会得し、一八〇〇年代の初頭に瀬戸に戻り、これを広めたとされる。その後、磁器生産が瀬戸において普及していくと、これらが「新製（焼）」と呼ばれるようになり、それまでの陶器の仕事が「本業（焼）」と称されるようになったという。これを受けて、例えば、二〇〇〇年に出版されたやきものについてのあるガイドブックには、次のような記述がみられる。

磁器が瀬戸に根付くと「新製焼」と呼ばれるようになり、陶器は「本業焼」となった。民吉が帰って一〇年後には、窯も約六割が磁器作りになった。

それでも本業焼にこだわる陶工がいた。そのひとりが水野半次郎だった。現在、瀬戸本業窯は六代目になる。初代から代々、かつて瀬戸で作られた日用雑器を焼き続けている。

ここでは、加藤民吉を磁祖としてはじまる瀬戸の磁器生産に対して、「本業」が「かつての」と、古くからの瀬戸の仕事であるといえる。ここにあるように、瀬戸における「伝統」は、近年、この瀬戸本業窯と結び付けられて語られることが多い。その基本的なプロットは、新しいものを取り入れることに積極的な「新製」と、古くからの伝統を守る「本業」という対比とともに提示されるもの



図2 瀬戸本業窯の登り窯（著者撮影） 図1 瀬戸本業窯（著者撮影）

である。瀬戸本業窯とは、「本業」の仕事を継続させている窯元の一つで、ここで取り上げられているのは、引用中にあるように、「水野半次郎」の窯のことである。「水野半次郎」とは、瀬戸本業窯の当主の名で、代々、その名を継承することになっている。現在の当主は七代目半次郎で、瀬戸の「本業」としては、もつとも知られる窯元となっている(図一)¹⁰。

そして、瀬戸における民芸運動との関わりは、まさに、この「瀬戸本業」との関係として位置づけられるのである。じつは、先の引用部は、次のように続く。

民芸運動が盛んになると、その理論が作陶の柱となった。

瀬戸には陶芸作家が多い。だが、初代から現在まで半次郎は「作家」ではなく「陶工」である。用と美を求めてごく普通の器を作ることは、簡単なことではない。新製焼をもたらした民吉のように、本業窯を続けた半次郎にも苦勞は絶えなかつたはずである。それを乗り越えてきた彼らに共通するのは、やはり「かまぐ

れ」の血なのだろう。¹¹

「かまぐれ」とは、瀬戸の窯屋で働く人々を指すというが、ここで注目したいのは、瀬戸本業窯の仕事は、柳らが民芸運動を展開するなかで、主張した「用」と「美」というキーワードとともに語られている点である。柳らは、民芸運動を創始する大正期の工芸界が、大局的には、「用」を手放して、「美」の方向へ進んでいると主張し、あえて、「用」のなかに「美」を見出そうとした。そして、この引用中の言葉を使うならば、「ごく普通の器」のなかに、こうした「用」に基づいた「美」があるとしたのである¹²。このように、瀬戸における本業(窯)は、民芸運動の理論に合致した窯であるとされている。

瀬戸本業窯では、二〇一七年に雑誌「和樂」(小学館)が仲介する形で、日清カップヌードル専用の「DOCK★DOCKクツカー」なるものを作成する企画があった。新潟県十日町市博物館所蔵の国宝「火焰型土器」をモチーフに、カップヌードルがびつたりと入るクツカーを作成するという企画であり、その作成を、瀬戸本業窯の八代目となる水

野雄介氏が手がけた¹³。その際の紹介にも、例えば、「人とともにあるうつわ 受け継がれる「民芸」の思想」や、「柳宗悦・白洲正子も愛した瀬戸本業窯で制作。火焰型土器レブリカの細部や立体感を参考にし、伝統の手わざ「櫛描き」で縄文模様を表現。民芸の器の象徴である「リーチハンドル」の様式を採用」などといった紹介が付されている¹⁴。ここでもやはり、民芸運動と結び付けられながら、伝統を継承するものとして、これが評価されているといえるだろう。

このような記述を踏まえると、瀬戸の「本業」が、伝統性とともに積極的に評価されているようにみえるだろう。もちろん、それはおそらく間違った解釈ではなく、「本業」の「本」という言葉にも、そもそもそうしたニュアンスが込められていたのかもしれない。しかし、過去の用法を眺めてみると、「本業」という言葉には、マイナスの評価というわけではないが、必ずしも積極的な価値が付与されていない場合も散見させる。次章では、このことを確認してみよう。

第二章 「新製」と「本業」

瀬戸における「新製」と「本業」とは、先に述べたように、加藤民吉以降、生産が拡大した磁器ものと、それ以前の陶器の仕事とを、それぞれ呼ぶものであった。これについては、例えば、次のように説明される。

豊臣秀吉の征韓後出征諸將にして多く彼の地の陶工を携へ帰るあり、彼等陶工が我が国に於ける陶磁器業の発達に貢献する所甚大で、これが為め九州の製陶業は精巧を極むるに至った。かの有田に於て李參平の製作した有田焼は、我が国磁器界の先駆をなしたのである。こゝに於て享和四年に至るや瀬戸の加藤民吉は九州に赴き、製磁の法を探り、辛苦慘澹 遂に其の秘奥を究めて文化四年帰国し、瀬戸に於て製磁業を始めた。これを磁祖とし、今窯神社として祀られている。爾來磁器製法を新製と呼び、在来の流れを酌めるものを本業と称してゐる。其の後本業焼より製磁業に転ずるも

のが次第に多く、文化一三年二月の調によれば、当時製陶業者が一六七戸で、内、本業七十九戸、新製八十戸だった。¹⁵

これは、一九三一年の『日本地理大系 中部篇 下巻』における地理学者・村松繁樹の記述である。文化四年とは一八〇七年で、この年を磁器生産の起点とするならば、それが、一〇年弱という短い期間に急激に拡大したということがわかる。

あるいは、先に参照した『陶器大辞典』には、次のようにある。

瀬戸では以前から、陶祖家系の世襲制として、永代轆轤一挺の法を立て、ゐたが、享保の初めから更に一家一人の制限を設けて、次男以下の就職を禁じたのである。その反動として磁器業が起こり、民吉が文化四年に瀬戸へ帰ってから、文政三年までの一四ヶ年に、許可を得て本業（陶器）より新製（磁器）に転じたもの百九十余人（或いは九十余人）に達したれば、「以

下略」¹⁶

ここからも、新製への転換がかなり急激に行われたことがうかがえる。『陶器大辞典』では、近代以降の状況の記述もあるので、続けてみてみよう。

明治以来（の瀬戸陶業…引用者注）は自由競争に入り、その十一年の瀬戸窯数は、丸窯が北に三十七、南に三、郷に十で、計五十。古窯が南に六十八、郷に二十二、洞に九十で、計百八十。外に本業窯が六十三あって、合計二百九十三と見えてゐる。降って明治四十一年には、丸窯十八、古窯百五十三、本業窯二十四で、他に素焼窯二百〇一、錦窯五八を加へ、合計四百五十四であった。又大正三年に至れば、丸窯二十登、古窯九十八登、本業窯八登、石炭窯九十五基で、素焼窯及び錦窯は加へずに、合計二百二十一であった。¹⁷

ここにある、「素焼窯」とは、成形し乾燥させた製品を、施釉する前に低下度（現在では、八〇〇度程度）で焼成す

るための窯のこと、「錦窯」とは、本焼（素焼して施釉されたものを焼成すること）が終了した製品に、さらに上絵付けしたものを焼き付けるための窯のことである。これらは、陶磁器業においては、一般的なものであるが、「丸窯」「古窯」というのは、少し特殊な区分だろう。村松によれば、次の通りである。

陶器（本業）に使用せらるゝ窯は本業窯と称せられ、之に対して古窯及び丸窯は磁器の焼成に使用せられる。此の三種のものは所謂登窯で、地形の傾斜を利用し、下方より上方へ初窯を連続せしめ、最下の室より点火し順次上方の室に及ぼすのである。然し松材欠乏の後、燃料が石炭に変化して用いらるゝに至つたものは石炭窯であつて、各種のものを一窯で焼くことが出来る。¹⁸

この説明によれば、「古窯」「丸窯」が新製の窯、「本業窯」は文字通り、本業の窯ということになる。『陶器大辞典』に説明されている経過からはつきりと分かるのは、本業窯

の数の減少だろう。その数は、一八七八（明治一一）年の六三から一九一四（大正三）年には八にまで減少している。ところで、ここで確認したいのは、実は、こうした産業転換の過程などではなく、その記述における「新製」「本業」という言葉の使われ方である。少なくともここで示した記述からは、この二つの言葉に、なんからの価値判断が付与されているようにはみえない。それらは、純粹にカテゴリー上の用語として扱われているのである。

一方で、「瀬戸本業」を主に扱つた『瀬戸市史 陶磁史編五』では、この言葉について、次のような説明がある。

本業焼の名称は、一九世紀初頭の磁器開発により、陶器生産との区別の必要性から生じた歴史的名称である。そして、この「本業」の言葉には、本業焼の方が伝統を守つた高い格式の保有者であるという誇りも込められている。それは、新たな染付生産は戸主の弟や、次男・三男に開放された生業であり、分家の職業であるという発生因をも表現しているのである。¹⁹

この記述の後段については、新製焼が、「次男以下の就職を禁じた」ことへの「反動」であったという先述の『陶磁大辞典』の概説にも合致する。また、前段についても、「本業」という字義を考えると、その通りなのであろうとは思われる。とはいえ、ここでみた引用以外のものも含め、少なくとも近代期においては、「本業」という言葉に「伝統を守った高い格式」という評価を付加していない記述が多いようにみえる。

第三章 瀬戸本業の「伝統性」の評価と民芸運動

もちろん、「本業」に明確に、「伝統性」を読み込むような記述も散見される。例えば、行灯の油受けとして、近世期に瀬戸や美濃で広く生産された「行燈皿（油皿）」に關する本には、次のようにある。

油皿又は行燈皿、行燈の台の上において油入をのせる、心を切きつておく。

尾張、三河、遠江、美濃、伊勢などを中心にする地

方に行われ、産地は瀬戸の本業窯を主とする。磁器製品もあるが少なく且つうつらない。²⁰

表現が少しわかり難いが、磁器≡新製に対しての、本業の製品の良さが示されている。あるいは、次のような記述もある。

「瀬戸」は、素晴らしい名だが、いまは香ばしいものでない。凡てを入れたら水準が落ちる。唐津と列ぶ瀬戸の名は焼物一式を込めて、つまらないものになった。「中略」所謂瀬戸物なる総称名磁器将来以後の話であらう。民吉が、当然に、その磁祖としてよい。瀬戸製品で天下を靡かせたのは、その以後磁器の大量生産時代に至ってからである。瀬戸は、磁器で繁昌した陶都だ。けれども、その瀬戸物の名は、名譽の記号ではない。名所は磁器以前の工人にある。

磁器将来の後、この新製染付に対し、旧来の瀬戸物は本業と呼ばれて命脈を保った。「洞」に行けば、尚ほ、我々は、その残存をみる事ができる。「洞」の工人

の仕事は侮らるべきではない。こゝに生れた民芸的な
雑器は、赤津の官窯が到底企て得ない特有の美を持つ
て居た。²¹

ここでは、より明確に、本業の伝統性が評価されているだ
ろうか。「磁器」すなわち「新製」で「繁盛した」瀬戸は、
「名譽の記号ではない」という。対して、「磁器以前の工人」
から引き継がれるような「旧來の瀬戸物は本業と呼ばれて
命脈と保った」というのである。

このような記述をみると、先の『瀬戸市史』の概説にあつ
たような「伝統を守った高い格式」が、「本業」という名
称に示されているのだという評価もうなずけるかもしれない。
しかし、この点については、その背後の事情を少し確
認する必要がある。実は、ここに示した二つの引用は、と
もに民芸運動に関わりのある人物によるものなのである。
一つ目に掲げた倉橋藤治郎は、民芸運動が創始される以前
の大正中期から河井や濱田の支援をしていた人物で、運動
創始後は、自身が興した工政会出版部より民芸運動初期の
重要な著作を出版するなどしていた²²。また、二つ目の引

用元となる著書もこの工政会出版部より出版されたもの
で、同書には柳の「添書き」も付されている。そのように
みてみると、瀬戸本業に対して、その伝統性を評価する語
りの生成には、その一面に民芸運動が関わっていたのでは
ないかと考えることができる。もちろん、先にも言及した
ように、前近代期から、そうした意識は存在したのだから
が、現在のな意味において、その「伝統性」が喧伝される
ことの一因として、民芸運動があつたという可能性を提示
することはそれほど外れたことではないだろう。

「はじめに」においても言及したように、民芸運動は、「遅
れた」工芸生産を「伝統」として読み替えることで、価値
付けるということを積極的に展開していた。陶磁器業の先
進地である瀬戸において、相対的に「遅れている」ともい
える本業の仕事に民芸運動が注目するのは、極めて自然な
ことといえるだろう。

ところで、民芸運動が活発な活動を展開する一九三〇年
代は、瀬戸ではすでに石炭窯による大規模な生産が盛んに
なっている時期でもある。それゆえ、民芸運動同人による
記述は、そうした産業化された様相と伝統的な「本業」と

の対比としても示される。次に示すのは、運動の機関誌であった雑誌『工藝』の創刊号に河井寛次郎が寄稿した文章である。独特の表現も含めて、瀬戸の「新旧」の様相の記述が興味深いものであるので、長くながるが続けて引用してみたい。まずは、石炭窯の仕事場周辺についての記述である。

北向の南新谷の傾斜地には路次（みちぎわ）が交錯する。行留りは大抵工場で石炭窯の土管の煙突が立って居る。炭殻の狭い路に沿ふて煤けた長屋が並ぶ。其少しの空地に黒く立枯れたコスモスがよれ／＼に漂ふて居る。其傍には腐った自転車（自転車）の胴体がころんで居る。

此辺の工場は大抵凹字形に作られ中が干場に使用される。碗皿井の類の干されて居る片方には匣鉢層、土の山、板切、道具類、大抵な物は此中に散乱して居る。仕事場の中は古い台所に瓦斯を取り付けた位の騒ぎではない。天井の低い木造の旧家内工業の中に石割機械が喧嘩して居る。土練機がうんこをして居る。機械轆轤（りゅうりゅう）がもみ合つて居る。こんな物が考へ出した人の魂が

移つたとても云ふ様に無暗に人を追ひまわして居る。²³

「腐った自転車」喧嘩して居る「うんこをして居る」といったネガティブな表現の記述を使って、この周辺の光景を記述していることがわかる。対して、本業窯および丸窯の周辺については、次のようである。

北新谷から洞へかけての傾斜面には南の日を受けて丸窯と本業窯が並ぶ。南新谷での蔭気は此処に来て豁然として晴れる。壮麗な丸窯が其処にある。しつかり建つた工場がある。石垣の様に積まれた窯道具がある。小山の様な松木がある。水甕、手水鉢、便器の類が干場に行列して昏々として日を吸ひ合つて居る。

草深い村の窯場にある慕はしいものが茲にも大抵はある。此辺の地域の土は地の膚で聖地の砂の如く踏むのも勿体ない陶土である。²⁴

「丸窯」とは、先述の通り、新製用の窯として用いられて

いたものでもあるが、ここでは、本業窯とともに、石炭窯に対するものとして扱われており、一転して、ポジティブな表現となっていることがわかるだろう。

おわりに

ここまでで簡単にみてきたように、窯業の先進地としての瀬戸における産地語りとしての民芸運動の語りは、この地における「後進」としての「本業窯」を、「新製」や「石炭窯」などと対比させながら、評価するものであった。こうした記述は、産地としての瀬戸について、産業としてそれを捉えるのとは異なるオルタナティブな語りでもあったろう。その意味において、現在の民芸窯評価に対して、民芸運動の言説がもたらした影響は少なくないのではないかと思われる。

一方、石炭窯に関する河井の記述からの引用にもあるように、産業化された産地としての瀬戸に対する運動同人の評価は良いものではない。もちろんそれは、一面には、対比的な存在としての「本業」を顕彰するためのロジックで

もあるのだが、基本的には、「新しさは「改悪」を意味する」とする柳らのまなざしが反映されているといえる。ただし、その一方で、本業についての評価も例えば、沖繩の壺屋や大分県の小鹿田といった、運動とより密接な関係を結んだ産地に対してみると、その筆致はやや控えめであるようにもみえる。実は、民芸運動にとつての瀬戸は、茶人によるそれと同様に、第一に重要な古作の産地としてあった。前章でみた「行燈皿」あるいは「石皿」と言われる皿類などがそれで、例えば、運動草創期に「民芸叢書」の第一篇として出版された『雑器の美』においても、表紙にこれが使われているし（図3）、雑誌『工芸』創刊号における図版特集もそうであった。これらは、民芸運動初期の蒐集品としては、極めて重要なものであり、「雑器」として疎んじられてきたもののなかに、工芸美術にも負けない「美」があるのだという柳らの審美観を実証するものとしても提示されてきたものであった。ただし、それらは、「行燈」用の皿であったように、生活の近代化以前に量産されたもの、すなわち古作であった。こうした「古作」の評価に対してみたときに、「現在」の瀬戸への運動同人の評価は、相対



図3 日本民藝美術館編『雑器の美』
(工政会出版会、一九二七)

的に低い傾向があり、そしてここに、本業窯評価とは、また別のフェーズとしての民芸運動と産業先進地との関わりの一面をみるのできるのである。

本稿では、とくに瀬戸の本業窯をめぐる産地語りとその評価について検討しながら、そこにおいて果たされたであろう民芸運動の役割について検討してみた。しかし、本論の副題にも示したように、本稿はそれらの本格的な検討のための「覚え」にすぎないものであり、資料的にも、ごくごく限られた範囲でしか検討を行っていない。また、瀬戸本業窯と運動との具体的な関わりなどについても考察し

ていく必要もあろう。今後はこれらを含めて、他産地との比較なども含めて、さらなる検討を行っていきたいところである。

付記：本論の調査にあたっては、科学研究費基盤研究(B)「地域文化」の概念的整理と現象分析への展開―地理学的方法論の試みとして―(課題番号：15H03279、研究代表者：大城直樹)の一部、および、第三二回(平成二八年度)公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団研究助成の一部を使用しています。

また、訪問のたびに親切な対応をいただいている瀬戸本業窯の皆様にも、末筆ながら記して感謝申し上げます。

注

1 例えば、高橋義雄編『大正名器鑑 第三編』大正名器鑑編纂所、一九二六は、「古瀬戸」の「茶入れ」のみで構成されている巻となっているほどである。ちなみに、茶器における「古瀬戸」とは、狭義には初代藤四郎の作のものということになっている。「春慶」もまた藤四郎

の号に由来するものであるが、「古瀬戸」とともに実際の作者については、不明なところが多い。

2 小田栄一責任編集『茶道具の世界5 茶入』淡交社、

二〇〇〇、八二―八三頁。ちなみに、高橋の『大正名器鑑』は、この「現代版」として構想されたものでもある

(熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』河原書店、一九九七、二二〇―二三二頁)。

3 前掲2)、八二―八三頁。なお、不昧には、『瀬戸陶器濫觴』(二八一―)という著作もある。『古今名物類聚』の要約のような性格ももつが、ともに、「名物の定本」とされることがある(小野賢一郎『茶碗鑑賞の書』宝雲社、一九三六)。

4 奥田誠一「陶磁器の研究と鑑賞」、『陶器講座 第二一卷』雄山閣、一九三七、一一―二八頁。

5 濱田琢司『民芸運動と地域文化 民陶産地の文化地理学』思文閣出版、二〇〇六、五五―八〇頁。

6 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」、『月刊民芸』一、一九三九、二三頁。

7 陶器全集刊行会編纂『陶器大辞典 卷三』五月書房、

一九八〇「一九三五」、三九三頁。

8 「L'arch」河井寛次郎 濱田庄司 柳宗悦司会 座談会」、日本民藝館、一九五三。

9 マガジントップ企画編集『やきものの里を歩く―窯元と陶工たちをめぐる旅―』山海堂、二〇〇〇、一〇九―一一〇頁。

10 現在の瀬戸において、本業の登り窯として現存するのは二基のみであり、ともにすでに現役の窯ではないが、そのうちの一つは、この瀬戸本業窯に残る(図2)。

11 前掲) 9、一〇九―一一〇頁。

12 民芸運動における「用」ということについては、別稿において検討もしているので参照のこと。①濱田琢司「民芸と民具とモノの機能」、『人類学研究所研究論集』(南山大学人類学研究所) 二、二〇一五、五六―六八頁、②濱田琢司「民芸的蒐集と資料性―アートのなものと資料とのあいし」、『アルケイアー記録・情報・歴史―(南山大学南山アーカイヴズ) 一二、二〇一七、七一―八九頁。

13 この企画の詳細は、「国宝誕生一二〇周年近年「国宝

応援プロジェクト」、<https://store.nissin.com.jp/feature/doki/special> (二〇一八年二月一八日最終閲覧)

参照。なお、当該のクッカーは、通常版が一五個限定で五九八〇〇円で、また意匠をより詳細にしたスペシャルバージョンが、一個のみ二二〇万円で発売され、インターネット上などでも話題となった。これには、モノの価値を考えるうえで、興味深い点が含まれるので、また別に論じる機会を持ちたいと考えている。

14 前掲13)。なお「リーチハンドル」とは、バーナード・リーチが、ピッチャーやカップ類において採用した持ち手の形で、一九五三〜五四年にかけての来日時等に訪問した、民芸運動と関わりがあった陶磁器産地を中心に、日本でも比較的広く採用されているものである。

15 村松繁樹「瀬戸の陶磁器業」、『日本地理大系 中部篇 下巻』改造社、一九三一、一三九頁。

16 前掲) 7、三九五頁。

17 前掲) 7、三九五頁。なお、「北」「南」「郷」「洞」などは、瀬戸の字名である。

18 前掲) 15、一三九頁。

19 瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史 陶磁史篇五』愛知県瀬戸市、一九九三、三頁。

20 倉橋藤治郎『油皿』工政会出版部、一九三七。

21 井上吉次郎『瀬戸物と美濃瀬戸』工政会出版部、一九三二、一頁。

22 倉橋については、濱田琢司「大日本窯業協会・工政会の倉橋藤治郎と胎動期の民芸運動―美術と産業の間への視線―」、『アカデミア 人文・社会科学編』(南山大学南山学会) 九一、二四九―三〇二頁を参照のこと。

23 河井寛次郎「瀬戸行」、『工藝』一、一九三六、三九頁。

24 前掲) 23、四〇―四一頁。